

「そうか。それはすまん。で、どうや、あっちの暮らしは？」「勉強は大変です。言葉のハンディがあるし、でもとてもためになります。」「そしてみんな熱心だし、自由だし、楽しいですよ」「そうか、がんばってんやな。」

「ほんで今回は何しに来たん。」「またそんな言い方する。あんたの事心配して来てくれたんやろな。」美子が即座に口をはさんだ。「分かってるがな。他に何かあったか？って言う事を聞いてんねんや。」昭男が弁解した。「もちろん分かってます。それで実はですね・・・。」雄大は平和シンポジウムの話をした。「実は留学生の仲間外国人向けの日本が受けた原爆投下の語り部ボランティアをしていて、それで声が掛かったんです。」

「それはええこっちゃ。ぜひわしも連れてってもらお。」「えーっあんた大丈夫かいな。無理したらあかんねんで。」美子がおどろいて声を上げた。「大丈夫や。それに雄大の晴れの舞台や、これ逃したら冥途へのみやげ話がなくなる。」

「またそんな事言うて。」「安心して下さい。僕が必ずサポートします。実は僕も是非おじいさんに知ってほしいと考えていたんです。」後日雄大は祖父昭男と共に大阪の平和シンポジウム会場に来ていた。



参加者は世界各国から日本に来ている留学生が中心となって、日本をテーマに研究と交流のために定期的にシンポジウムを開催している団体の会員達だった。今年「平和」と「核廃絶」がテーマになっていて、雄大がスピーチする事になっていた。昭男は一人会場の後方で席に座り彼の登場を待っていた。会場内で話される言葉は全て英語だ。昭男は殆ど理解できなかったが、皆がいかに真剣で前向きな気持ちで臨んでいるかはひしひしと感じていた。いよいよ司会者が雄大を紹介し、彼が演壇の前に立った。「Nice to meet you. . . .」

「My name is Takehiro Yamamoto. . . .」彼は緊張感を伴いながらも力強いスピーチを始めた。

「8:15AM, August 6th, 1945 An atomic bomb was dropped to Hiroshima City, Burned to heat Killed and thousands of times per second blast of hundreds of meters to tens of thousands of people in an instant. All buildings, trees, and bridges in the town collapsed, (裏へつづく)